

「いじめ対策ネットワーク研究」

成 果 報 告

いじめ問題の解決に向けて IV



平成23年 3 月

愛媛県教育委員会人権教育課

はじめに

いじめは児童生徒の人格を著しく損なう差別であり、人の命にかかわる重大な人権侵害であることから、この問題に対する学校や家庭、地域社会の意識や取組の在り方が、厳しく問われています。

愛媛県教育委員会では、いじめ対策を教育重点施策の一つに掲げ、問題の速やかな解決と防止のため、児童生徒の立場に立った相談活動や学校を支援する体制の充実を図るとともに、事案によっては、関係諸機関とも連携しながら指導の徹底に努めているところです。

平成 19 年度からは、地域ぐるみの総合的ないじめ対策についての調査研究を推進するため、文部科学省の委託を受け、県内 1 市を研究推進地域に指定し、いじめの未然防止、早期発見・早期対応につながる取組や、学校・家庭・地域・関係諸機関等によるネットワークを生かした取組などについて実践研究を行い、その成果等をまとめた資料「いじめ問題の解決に向けてⅠ～Ⅲ」をもとに、県内への普及に努めています。

本年度は、研究推進地域を中予地区の東温市に指定し、市内の重信中学校と校区内の 4 小学校（北吉井小学校・南吉井小学校・拝志小学校・上林小学校）を研究推進学校群として位置づけ、課題解決に向けた調査研究に取り組んできました。この取組についてまとめた本報告書を、各市町教育委員会・学校等における問題解決に向けた今後の取組にお役立ていただければ、幸いと存じます。

最後になりましたが、調査研究に取り組んでいただいた東温市と各学校の皆様をはじめ、本事業に御協力いただいた関係各位に心から感謝を申し上げます。

平成 23 年 3 月

愛媛県教育委員会人権教育課長

目 次

はじめに

I 研究の概要

- 1 研究テーマ 1
- 2 研究テーマを設定した背景..... 1
- 3 研究内容..... 1
- 4 研究の推進組織体制..... 1

II 研究の実際

- 1 東温市の取組..... 2
- 2 研究推進学校群の取組..... 3

III 研究の成果と今後の課題

- 1 東温市の取組..... 12
- 2 研究推進学校群の取組..... 14

I 研究の概要

1 研究テーマ

「いじめを生まない学校づくりに向けた総合的な取組」

2 研究テーマを設定した背景

東温市では、いじめ問題・不登校の解消を目指し、平成 21 年度、市の単独事業として「よりよい学校生活と友達づくり事業」を展開してきた。いじめ問題・不登校を解消する手だてとして、心理検査（Q-U）を活用し、一人ひとりの児童生徒に目を向け、学級を組織として理解することにより、児童生徒同士のよりよい人間関係づくりに努めてきた。その成果として、いじめや不登校の減少が見られたものの、その減少はわずかであり、まだまだ十分と言える状況ではなかった。そこで、研究テーマ「いじめを生まない学校づくりに向けた総合的な取組」を設定し、これまで以上にいじめの未然防止、早期発見・早期解決を図ることとした。

3 研究内容

ア よりよい学校生活と友達づくりの更なる推進

児童生徒自身が他者とのかかわりを大切にし、仲間づくりをしていこうとする意識を更に高めていく必要がある。児童生徒一人ひとりの心の状況を的確に把握し、適切に対処を行うことにより、よりよい学級づくり・学校づくりを推進することとした。

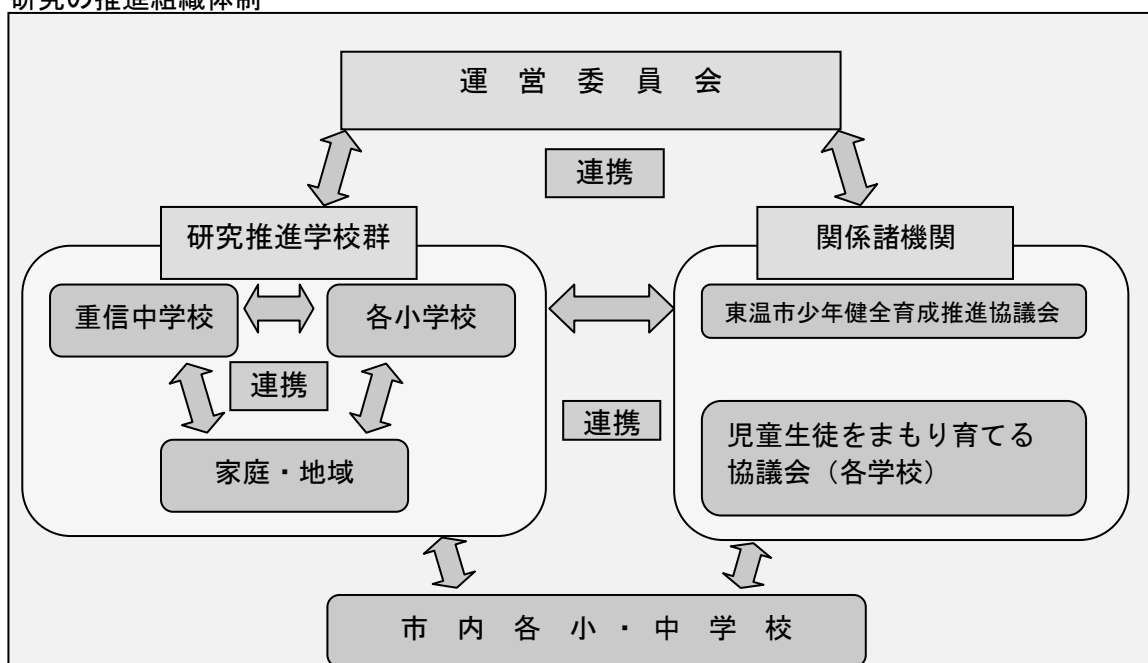
イ 小中学校の連携、学校と関係諸機関との連携

各学校や諸機関は、それぞれの立場でいじめ問題の解消に取り組んできたが、相互の連携はまだ十分とは言えない。この連携を強固にする手だてを様々に講じることが必要である。特に、小中学校の連携及び小学校間の連携を図るため、市内の小中学校と小学校を研究推進学校群として組織し、研究を進めることとした。

ウ 家庭・地域との連携

いじめ問題は、学校のみで解決できるものではない。家庭や地域の協力が不可欠である。特に、家庭における教育は、直接子どもの成長を左右するものであり、保護者はその自覚をもつことが大切である。いじめ問題を自分のこととして捉え、予防や解決を図ろうとする積極的な姿勢の形成を図るための方策を探ることとした。

4 研究の推進組織体制



II 研究の実際

1 東温市の取組

(1) 心理検査(Q-U)を活用した実態把握と対応

平成 21 年度より実施している心理検査 (Q-U) の拡充を図った。平成 21 年度は、小学校 4・6 年、中学校 1・3 年に年 1 回実施していたものを、全ての小中学校全学年に年 2 回実施することとした。第 1 回は 6 月、第 2 回は 11 月に実施した。この検査を実施した後、それぞれの学校において校内研修会を行い、配慮を要する児童生徒への指導の手だてや支援方法の共通理解を図ったり、今後の学級経営や学年経営等の方針を定めたりすることにより、よりよい学校生活の構築を図った。

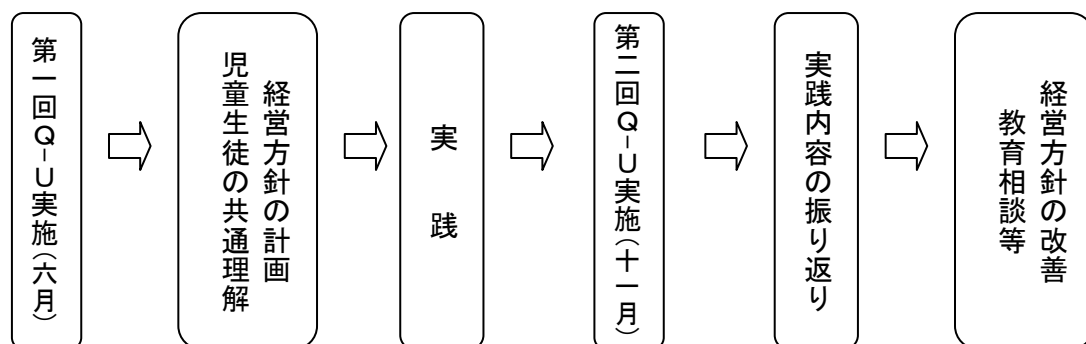


図 1 Q-Uプロット

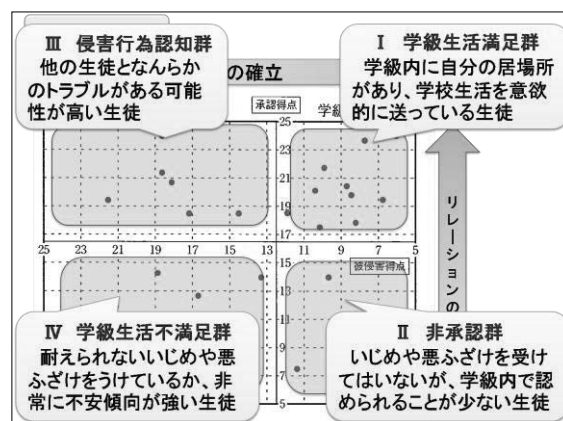


図 2 Q-Uプロット

(2) 教職員研修会の実施

夏季休業中に、東温市教職員研修会を開催した。広島県立教育センターより講師の先生を招き、「いじめ・不登校を生まない学校づくりのために」と題し、心理検査 (Q-U) 分析と効果的な活用について講話をしていただいた。児童生徒の心を育てる指導について、具体的な事例をもとに話をしていただいた。この講演から、学級づくりは、一人ひとりの子どもの心を読み取り、組織としての学級の特徴を知り、対策を立てることが重要であることを学んだ。

約 130 名の参加者があり、実りのある研修を行うことができた。

(3) リーフレットによる啓発及び連携

いじめの未然防止、早期発見・早期解決、保護者や関係機関との連携を目的としてリーフレットの作成を行った。このリーフレットは、各学校代表の教員の手によって作成されたものであり、東温市人権教育協議会の協力を得てできた。各学校の全ての家庭、児童生徒



東温市教職員研修会



リーフレット

をまもり育てる協議会、東温市少年健全育成推進協議会の各委員、市内教育相談室等の関係諸機関に配布し、啓発活動及び連携の一助とした。

- (4) 学校と相談機関との連携を図るための研修会の実施
東温市内の教育相談関係者が集まり「いじめ・不登校等対策ネットワーク向上研修会」を行った。前半は臨床心理士の講話によるカウンセリングの基本姿勢や心構えなどについて研修を行った。後半は市内全小中学校の生徒指導担当者、ハートなんでも相談員、市の教育相談員、スクールソーシャルワーカー等による情報交換会を行った。



いじめ・不登校等対策
ネットワーク向上研修会

この研修会を通して、カウンセリングの基本姿勢を改めて確認することができた。また、各学校の取組の状況を理解するとともに、それぞれの悩みを解決するための意見交換を行うことができた。また、各学校間の横の連携や関係諸機関との連携を図ることができた貴重な会となった。

- (5) 取組についての検証

上記(1)から(4)までの取組について、その成果や課題を確認するために、以下のような検証を行った。

ア 児童生徒の実態把握とその対応について

- 各校のいじめの認知数及び不登校児童生徒数の過年度との比較
- 心理検査（Q-U）における第1回調査と第2回調査の比較
- 教職員に対する心理検査（Q-U）の活用状況の調査

イ 研修会の効果について

- 参加者に対するアンケート調査による検証

ウ リーフレットによる啓発活動について

- 保護者に対するアンケート調査による検証

エ 研究推進学校群の取組、小中の連携について

- アンケート調査による検証
- 感想や観察等による検証

2 研究推進学校群の取組【重信中学校、北吉井小学校、南吉井小学校、拝志小学校、上林小学校】

研究推進学校群では、研究テーマ「いじめを生まない学校づくりに向けた総合的な取組」を受けて、「心と心 つながるやさしさ 咲く笑顔」を合言葉に以下のような取組を行った。

- (1) 小中学校の連携について

ア 中学校1年生の授業参観及び情報交換会での取組

- 実施日 平成22年5月24日（月）



授業参観



情報交換会

- ねらい

1年生の授業参観を行い、中学校担当教師と小学校6年生担当教師で情報交換を実施し、小中学校の連携を強め、中1ギャップを解消し、生徒一人ひとりがよりスムーズに中学校生活を送れるように支援する。

- 内容

校区内4小学校から、旧担任や生徒指導担当の10名の教師が参加し、1年生7クラスの授業参観後、情報交換を行った。これまでも年度末に小中学校間での連絡会をもち、中学校

に入学する児童について情報交換を実施していた。本年度は中学校へ入学して2か月を過ぎた生徒が授業に取り組む姿を実際に参観し、情報を交換した。生徒一人ひとりの理解を深め、小中学校の連携の在り方について共通理解を図ることができた。

イ 小学生の部活動体験

- 実施日 平成22年8月4日(水)・5日(木)
午前・午後各2時間

○ ねらい

来年度、入学してくる小学校6年生を対象に部活動の見学・体験をさせることにより、中学校入学に向けての目的意識をもたせるとともに、中学校に対する不安を解消させ、よりスムーズに中学校生活に適應できるようにする。

○ 参加児童の感想とアンケートの結果

2日間で96名(延べ人数)の児童が参加。活動終了後に参加児童に次のようなアンケートを実施した。



女子バスケットボール部

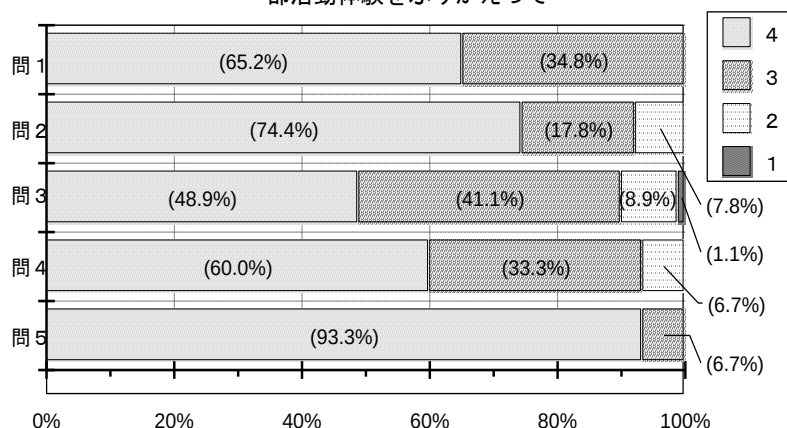


吹奏楽部

問1	中学校の部活動がどのようなものか、よくわかった。	4…3…2…1
問2	中学校の先生や中学生と楽しく部活動に参加できた。	4…3…2…1
問3	参加した部活動にぜひ入ってみたいと思った。	4…3…2…1
問4	中学校に入学してから部活動に意欲的に取り組みそうだ。	4…3…2…1
問5	来年も部活動体験を続けたいと思った。	4…3…2…1

4 … (よくあてはまる) 3 … (だいたいあてはまる)
2 … (あまりあてはまらない) 1 … (あてはまらない)

部活動体験をふりかえって



〈参加児童の感想〉

- テニスの楽しさがわかりました。テニスをしたことがない人に優しくする先輩たちが大好きになりました。ぜひ入部したいと思います。(男子・ソフトテニス部)
- ボールが普段より大きくキャッチしにくかったです。いつもより高いリングにシュートが入ったのがうれしいです。走り込みをただけでばててしまったことが私の課題です。パートナーの先輩も優しくわかりやすかったです。(女子・バスケットボール部)
- 私はホルンを吹く体験をしました。最初はなかなか音が出なかったけど、音が出たときはとてもうれしかったです。ドからソまでを吹けるようになって、チューリップが途中まで吹けるようになりました。中学校では吹奏楽部に入りたいです。(女子・吹奏楽部)

ウ 小学校6年生の中学校授業参観及び交流会

- 実施日 平成22年12月6日(月)

<日程>

5校時	13:20~14:00	授業参観	南吉井
		指導講話	北吉井・拝志・上林
6校時	14:10~14:50	授業参観	北吉井・拝志・上林
		指導講話	南吉井
	15:00~15:30	交流会(体育館)	
			中学校1年生が企画・運営



交流会(重中○×クイズ)

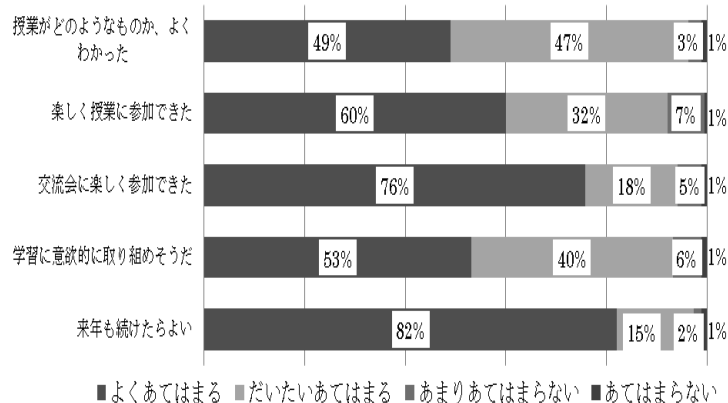
＜参加児童の感想・アンケート結果＞

○ 英語の授業参観で難しい単語が出てきて、中学校の勉強の大変さがわかりました。教科書もぶ厚くて重そうでした。あと4か月で中学生になるけど、そのためのいい勉強になりました。交流会では、中学生や他の小学校の人との交流が楽しくできました。

(女子)

○ 今日一番心に残ったのは、書くスピードや話すスピードがすごく速かったことです。自分のなかでは「大丈夫、大丈夫」と思っていたけど、思ったより速かったので、速く正確に書く練習をしたいと思います。これから中学校生活にむけて、予習・復習をしっかりしたいです。(男子)

○ 最初に生徒指導の先生のお話を聞きました。重中にはたくさんのルールやきまりがあることがわかりました。中学1年生のアンケートにも、大切なことがたくさんあったので、今からできることをしっかりやりたいです。中学生との交流会では、チームをつくって〇×クイズをしました。すぐにチームがつくれたのでよかったです。(女子)



○ ねらい

- ・中学校生活を実際に体験することや、中学生・他の小学校の同級生との交流を通して、進学に対する意欲を向上させるとともに不安の解消を目指す。
- ・小学校卒業までに、中学生としての心構えを育てる。
- ・中学校1年生は交流会の企画・運営などの活動を通して、先輩としての自覚を高め、中堅学年としての心構えを育てる。



ALT との英語の授業

(2) 心理検査（Q-U）を活用した取組について（中学校の例）

ア QU活用シート

6月に実施した心理検査（Q-U）の結果を基に、次のシートを学級ごとに作成した。夏季休業中に、研修職員会をもち、心理検査（Q-U）のアンケートやプロット図の見方や活用の仕方について共通理解を図り、学年部会で各クラスの実態や傾向、特に個別の指導や支援が必要と考えられる生徒について、2学期以降の対応を話し合った。第2回（11月）の心理検査（Q-U）実施後、取組についての評価をして今後の手だてを再度確認し、3学期の指導や支援の方法について共通理解を図った。

QU活用シート

1年〇組 生徒数(32)人 男子(18)人・女子(14)人

学級調査用プロット図		学級調査用尺牒 分析表		
調査項目	調査結果	カテゴリ	人数(6月実施)	人数(11月実施)
学級生活満足度	満足度	I 満足群	(18)人(40%)	(22)人(71%)
		II 非承認群	(3)人(7%)	(4)人(12%)
		III 従属行為承認群	(4)人(13%)	(3)人(10%)
		IV 不満群	(3)人(10%)	(2)人(6%)
学級生活不安要因	不安要因	不安要因	(0)人(0%)	(1)人(6%)

※プロット図の——は6月、——は11月の分布を示している。

1 学級の実態および問題と感じていること

- ・女子生徒のリーダーが不足している。
- ・立場の弱い生徒に対して、配慮できる生徒が少ない。
- ・素直で一生懸命であるが、時と場に応じた言動ができない場面が見られる。

2 個別の指導・支援が必要な生徒と問題と考えられる点

① 男子〇番	行動が遅い。文字を書くことが苦手。言動が幼い。孤立しがち
② 女子〇番	遅刻・欠席が増えている。兄・姉が不登校傾向であった。
③	
④	
⑤	

3 今後の具体的な取組の手立て

〈学級全体への対応〉

- ・あゆみ指導の徹底。教育相談の充実を図り、生徒理解に努める。
- ・みんなが安心して生活できる集団づくりに努めるなかで、ルールを守ることや人を思いやることの大切さを理解させる。
- ・道徳・学級活動の充実を図り、豊かな人間関係づくりに努める。

〈個別の生徒への対応〉

- ・教育相談の充実を図り、その場その場で適切に支援・指導を行う。
- ・委員会や係の仕事、部活動で個々の強みを認める場面をとらえ、肯定的な評価を大切に、励ましなどの声かけを行う。

4 取組についての評価と今後の取組

〈評価〉

- ・委員会や係の仕事、部活動において、意図的に認める機会を増やし、充実感ややりがいを実感できるようになった。
- ・あゆみ指導や教育相談の充実を図ることで、生徒の不安や悩みを把握し迅速に対応することができ安心した生活を確保できるようになった。
- ・学級アンケートによって、生徒自身が班友の悩みや学級の課題を把握し解決する機会を設けることで、安心して生活できる集団づくりに努めようとする集団の雰囲気ができた。

〈今後の取組〉

- ・今回行った取組を継続して行っていくことが大切だと感じる。

イ 学級活動での取組

QU活用シートから学級の傾向や生徒の状況を把握し、その実態に応じた適切な指導を行い、学校生活の向上につなげるための学級活動を展開した。

右の図は、ある学級の6月に実施した心理検査（Q-U）の「学級満足度尺度」のプロット図である。

この学級では、「侵害行為認知群」に4名、「学級生活不満足群」に3名と、学級での生活に何らかのトラブルがあったり、ストレスを感じたりしている生徒の存在を確認できた。

そこで、つらい思いや悲しい思いをしている生徒をなくすことを目指し、以下のような学級活動を展開した。

- 主題「学級集団の生活の向上に向けて」
- ねらい

アンケートの結果から、学級の諸問題を把握し、その解決に向けて話し合い、よりよい人間関係づくりを進める。

- 内容
 - ・学校生活の向上に向けてアンケートを作成し、実施する。
 - ・アンケートの集計結果から学級の問題点について把握する。
 - ・人間関係における学級での問題点について、改善するための具体的実践について話し合う。
- 実践の内容

6月の心理検査（Q-U）の結果概略を生徒に知らせ、学級の実態を把握させ、その改善に努めさせることの必要性を感じ取らせた。

次に、「学校生活の向上に向けてのアンケートを作成しよう」という課題でアンケートを生徒自身に作成させた。そのアンケートを集計した後、学級の問題を焦点化し、その解決策や具体的行動について話し合いを行った。

- 学級担任の考察

上の図は、11月に実施した心理検査（Q-U）「学級満足度尺度」のプロット図である。この結果から本学級は、親和的でまとまりのある学級集団になりつつあると考えられる。学級集団の諸問題を生徒の力で解決させる活動を通して、明るく好ましい人間関係を構築することができ始めたと思われる。しかし、不満足群に属する生徒が1人おり、その生徒の変容を図ることはできなかった。今回実施してきた取組は今後も継続していくことはもちろんのこと、更に個に応じた指導や支援を行っていききたい。

(3) 各校独自の取組について

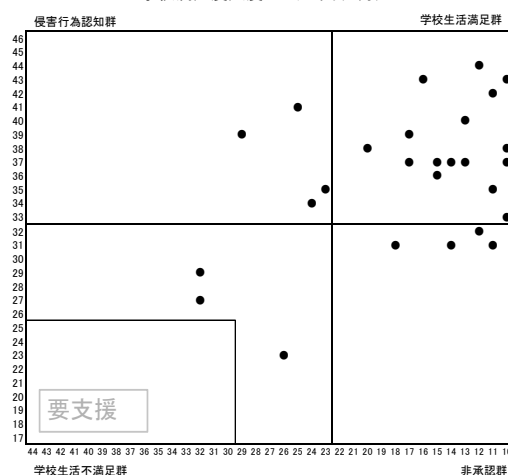
<北吉井小学校>

学校生活における本校児童の人間関係のトラブルは「言葉の力・話す力」の未熟さによるものが多く、言葉によるコミュニケーション能力の向上を大きな課題と位置付け、研究に取り組んだ。

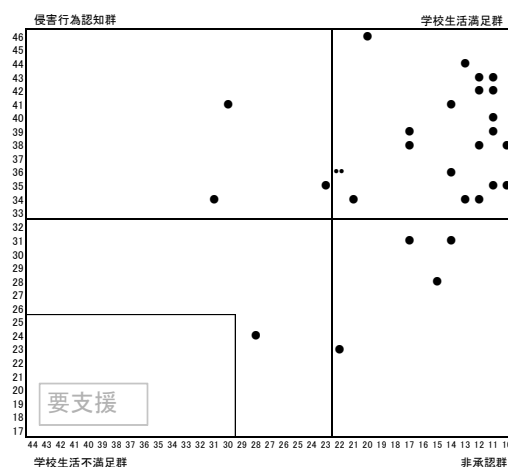
ア かかわり合いを重視した授業研究

児童が主体的にかかわり合う言語活動を充実するため、学習サイクルや単元構成を改善し、豊かに話す・聞く、人とよりよくかわる、よりよく学ぶ力を児童に身に付けさせたいと考えた。そこで、よりよい授業のキーワードとして、「何度も練習」、「ゴールに向かって」、「子どもの言葉で」、「子ども同士が」、「子どもが気付く」の五つを掲げた。このキーワードをチェッ

学校満足度尺度プロット図(6月)



学校生活満足度尺度プロット図(11月実施)



クしながら授業改善・授業実践へ取り組み、東温市教職員研修会では、授業を公開した。

○ 第1学年生活科「あきとあそぼう」

桜組（特別支援学級）

生活単元学習「あき どんぐりまつりに行こう」

他者と多様にかかわり、相手に応じた話し方、聞き方、接し方を身に付ける実践に取り組んだ。桜組児童は、1年生との交流学习を重ね、場面に応じたソーシャルスキルを学ぶ場として設定した。

○ 第3学年道徳「心と心をつなげよう」

自分や他者とのかかわりを深めるために、登場人物の行為を追体験し、自分の経験などを基に気持ちや考えを想像する感情移入の場面を大切にした。

イ よりよい人間関係づくりを目指す学校行事

本校では、なかよし班（縦割り班）活動で清掃を行っている。清掃分担の割り振りや作業の指示、反省会などの言語活動を通して協働体験を積んでいる。11月実施のなかよし遠足は、なかよし班員で飯ごう炊さんの計画、準備、活動、片付けまでを行う遠足である。

今年度は、6年生が中心となって、各学年の実態に応じた作業の分担をし、安全な行き帰りの計画や思い出に残る遊びの計画を立てる話し合い活動を行った。毎日の清掃活動を通して自分たちが築いてきた人間関係を生かし、互いが自分のできることやできそうなことを伝え合うなかで、目的に沿った遠足になるよう計画を立てることができた。また、当日は快晴の下、全員が目的意識や相手意識をもって活動に取り組むことができた。



生活科・生活単元学習



道 徳



なかよし遠足

＜児童の感想＞

○ ごはんはこげたけど、みんなといっしょに作ったカレーがおいしかったので、よかったです。みんなが1年生に優しくしてくれてうれしかったです。（1年生女子）

○ 6年生として下の学年にどのようにして教えればいいかなといろいろ考えていました。班のみんなが頑張っていたので何か伝えられたかなと思います。（6年生男子）

ウ 保・幼・小の連携

1年生を迎える会では、「1年生が主役」を合言葉に、上級生が1年生の思いをくみ取るように働きかけを行うことを意識させた。今年度から幼稚園・保育所の教職員や保護者も招き、なかよし班の中に入っていた。上級生は、教職員や保護者から1年生の好きな言葉や配慮点など、かかわり方を具体的に教わった。また、クイズやゲームなどで互いが積極的にかかわり、それぞれが自信をもって活動することができるようになった。また、活動後は、感想発表の場や各学級で互いの頑張りや成長を認め合える振り返りの場を設定した。



自己紹介クイズ



新聞乗りゲーム



1年生にインタビュー

<児童の感想>

- 私は、自己紹介クイズが楽しかったです。わけは、私の好きなものと同じものが好きな人がたくさんいてうれしかったからです。(2年生女子)
- 自己紹介クイズ・新聞乗りゲームなどがあって楽しかったです。1年生が喜んでいたので、うれしくなってきました。これからもなかよし班で仲良くしたいです。(4年生男子)

<南吉井小学校>

友達とよりよくかかわろうとする力を育てるために、言葉の力の習得や積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成に努めたり、集団内で互いに尊重し、認め合う支持的風土を培っていくための実践を行ったりした。

ア かかわり合い、伝え合う場の充実

国語科を中心として児童に育てたい言葉の力を明確にし、それを育てるための言語活動を工夫した。

○ 第1学年国語科「すきなものおしえて」

友達と尋ね合い、答え合って、やり取りを楽しむ学習を行った。まず、教師が児童に質問をし、それに児童が答えるという、教師のリードによるモデルを示し、児童の学習活動に対する抵抗感をなくすようにした。その後、隣の席の友達と、「聞き合い―教え合い」の活動を行った。そして、尋ねたことを基に教材文のように文章を書き、みんなに知らせるようにした。

○ 第5学年国語科「インタビュー名人になろう」

本単元は、目的に沿って尋ねることを整理し、相手に分かりやすく話したり、答えを正確に聞いたりすることを目指した。インタビューする際に、相手の答えをあらかじめ予想しておき、それに対しての次の質問を考えるという学習活動は、児童にとってやや難しい活動である。そこで、ロールプレイを実施したり、個への支援を充実させたり、繰り返し練習をさせたりするなどの工夫を行った。

イ 異年齢集団(なかよし班)による活動の活性化

○ 「あそぶデー」の実施

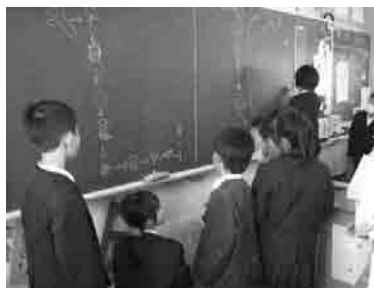
異年齢集団でのかかわりを通して、相手を思いやろうとする心情を育てることをねらいとして、なかよし班による遊びの時間を設定した。7月、9月、12月、3月の4回実施した。

○ なかよし遠足の実施

なかよし班の全員が協力して、楽しく飯ごう炊さんをするをねらいとした遠足を実施した。天候不良のため、河原に行くことはできず、校内遠足になったものの、班でゲームをしたり、カレーライスを食べたりして親睦を深めた。



第2回「あそぶデー」



第3回「あそぶデー」



なかよし遠足

<児童の感想>

- 今日、「ペットボトルキャップ積み競争」をしました。自分がするときどきどきしていたけど、友達が「がんばれ」と言ってくれて勇気が出ました。とても楽しかったです。(2年生女子)
- あそぶデーで「絵しりとり」をしました。ぼくは、絵がへたなので不安だったけど、みんなが励ましてくれたのでうまくできました。また、みんなと協力して活動したいです。(3年生男子)
- なかよし遠足では、班のみんなと楽しく「風船バレー」と「フルーツバスケット」をしました。みんなで仲よく楽しく活動できました。6年生がみんなのために作ってくれたカレーは、とてもおいしかったです。(5年生女子)

ウ 学級経営の充実

○ 学校生活アンケートの実施

昨年度まで年3回であった学校生活アンケートを、今年度は5回実施した。その後に児童一人ひとりと教育相談を行うようにした。また、学年会や生徒指導部会、職員会で情報交換会を行い、悩みや不安を抱えている児童に複数でかかわることができるようにした。

○ 人権標語の作成

全校児童一人一点、人権標語を作成し、校内に掲示した。また、市の「人権を語る集い」に合わせて、数点を公民館にも掲示した。



人権標語

○ 「なかよしアンケート」の実施

言われてうれしい言葉、言われて嫌だった言葉を尋ねるアンケートを実施し、その結果を基に各学級で話し合いを行った。

○ 「よいところ見つけカード」の活用

友達のよいところを見つけようとする態度を育てたり、自分では感じていない自分のよさに気付かせたりすることをねらいとして、「よいところ見つけカード」に友達のよいところを書いて渡し合った。

<拝志小学校>

全校児童 90 名の本校では、小学校卒業までクラス替えがなく、固定化した人間関係や友達のイメージを変えることは難しい。しかし、異学年の交流や縦割り班で全校児童が入り交じって遊ぶ機会をつくりやすい。そこで、友達の見方を変えたり、かかわりの少ない児童とのコミュニケーションを図ったりすることができるように、次の取組を行った。

ア 道徳の時間の充実

道徳の時間では、「信頼、友情」「思いやり、親切」を各学年の重点項目として扱った。相手に対する気持ち、心が通じ合ったときの気持ち、よりよい仲間づくりをしていこうとする気持ちなどを、児童の言葉で表現する時間を確保した。

第3学年「いいち、にいつ、いいち、にいつ」の実践では、次のような言葉で表現された。

<児童の言葉>

- あいちゃん、だいじょうぶかな。いたそう。あいちゃん、わたしもいきをあわせるよ。
- とても心配になってきた。どうにもできなくなってきた。声をかけて、歩くしかない。



授業の様子

イ にこにこなかよし集会（全校遊び）

各学級でのなかよし遊びは定着しており、学級のなかよし遊び係がよく呼びかけて実施している。最近では、3年生が2年生を誘ってなかよし遊びをする様子なども見られる。また、小規模校の特性を生かして、全校での遊びの時間を設けた。本校では、全校給食を縦割り班で行っており、全校給食の班を使っていくつかの遊びを決めて遊んだり、なかよし委員会が呼びかけて、全校で一つの遊びを決めて遊んだりした。学年 10 数名の人間関係から、全校 90 名の人間関係への広がりがみられた。



全校児童が遊ぶ様子

＜児童の感想＞

- 4年生の人が「いっしょに走ろう」と言ってくれて、うれしかった。(2年生)
- 1年生にボールを渡してあげる人がいて、やさしいと思った。(3年生)
- 終わった後で、みんなが「うまくよけたやん。」などとほめてくれたので、うれしかった。(4年生)
- 1年から6年まででけいどろをすることはあまりないので、いい機会だった。それにしても、6年の〇〇くんは速いと思った。ふだんはみんな別々で遊んでいるけど、このようにみんなと遊んだことで、ちがう楽しみ方ができた。(5年生)
- 1～5年の子と遊べてよかった。おとなしい子かなと思っていただけ、いっしょに遊んでみると、元気だった。なかなか低学年の子と遊ぶ機会がないので、遊べてよかった。つぎのなかよし遊びでも、友達のいいところを見つけれたらいいと思った。(6年生)

ウ 拝志小学校こどもの問題協議会（地域との連携）

拝志小学校区における子どもに関する諸問題への対応について、学校・家庭・地域が協力して取り組むべき課題を協議するため、三つの委員会を設置し、子どもたちの健全育成を図っている。

- 個別問題委員会（いじめ・不登校等の個別問題に関することについて協議）
 - ・ いじめ・不登校の実態について話し合い、指導方針や学校・家庭・地域の役割を確認した。
- ふれあい委員会（子どもと地域・家庭のふれあい活動の企画・運営）
 - ・ いのこ作りを実施した。わらの準備を協力してもらい、長寿会の講師から指導を受けた。
 - ・ 敬老交流会を実施し、竹とんぼ作り、しめ縄作り、布草履作り、昔の遊び等の活動を行った。これらの活動に各公民館長、婦人会、長寿会等が携わって運営を行った。活動後には、全校児童から交流のお礼の手紙を書き、感謝の気持ちを伝えた。
- 環境問題委員会（地域の子どもを取り巻く環境整備）
 - ・ 今年も7月に委員会メンバーで通学路点検を行った。
 - ・ 県道の清掃や除草、地域での危険な遊び防止対策を行った。
 - ・ 信号機、横断歩道、街灯等の設置申請や害獣駆除の要請を行った。



敬老交流会



敬老交流会



お礼の手紙

＜上林小学校＞

本校児童の多くは、保育所のころから同じ環境で育ってきており、互いの長所や短所をよく理解している。また、地域の方々の温かい心遣いに触れて育つ機会が多く、他者に対して優しい気持ちを向けることができている。しかし、小規模校なので、人間関係の固定化・序列化がみられ、よりよい人間関係を構築できにくい面もある。そこで、助け合い、支え合う集団の育成や家庭・地域及び中学校とのつながりを大切にした活動を通して、お互いが認め合う、いじめを生まない学校づくりに取り組んだ。

ア 授業の充実

- 「思いやり・親切」に焦点を当てた道德の時間
第1学年の「ぼくのはなさいたけど」の授業では、生活科で保育所と交流したことを思い出し、資料を読んで話し合い、自分の生活を振り返ることができた。身近にいる人たちに温かい心で接し、相手のことを考えて親切にしようとする実践への意欲が高まった。
- 地域人材を活用した総合的な学習の時間
地域の方と年間を通して繰り返し交流できる活動を学習の中に取り入れた。温かい交流が生まれ、地域で子どもたちを見守り、育てていこうとする意識が高まってきている。この活動は、



授業の様子



豆腐作りを通しての交流

児童間の人間関係によい影響を与えている。

イ 縦割り班活動と保・小の連携

○ 縦割り班活動

清掃活動や全校給食、集会や遠足などを縦割り班で実施した。これらの活動を通して児童間のつながりが育ち、昼休みなど全校児童が一緒になって遊ぶ姿が見受けられた。

○ 保・小の連携

田植え、稲刈り、もちつき、さつまいもの植え付け、収穫などの様々な活動を保育所と合同で行った。それらの活動を通して、保育所との異年齢による助け合いが生まれ、子どもたちのつながりがより深まった。

ウ 家庭・地域との連携

○ 地域ボランティアや保護者との連携

2学期から、地域ボランティアによる読み聞かせを行っている。第1回は、名前は世界でたった一つの家族からの贈り物という内容の詩「なまえ」であった。

この読み聞かせをきっかけとして、1～3年生は、人権・同和教育参観日で家族に聞いた自分の名前に込められた思いを発表した。また、4～6年生については、校長が子どもには内緒で名前に込められた思いを保護者に書いてもらい、全校朝会で紹介した。地域ボランティアや保護者と連携することによって、名前の大切さを知るとともに、自分や友達を大切にしようとする気持ちを高めることができた。

○ 学校だよりによる啓発や情報発信

学年ごとの児童の実態に照らし合わせたねらいで、人権・同和教育に焦点を当てた授業やなかよし集会を参観日に公開した。一人ひとりの考えを大切にし、みんなに出番があるような展開を心がけて授業や集会を行った。また、この日、参加できなかった家庭にもなかよし集会の様子が伝わるように、学校だよりで発信した。



田植え

＜児童の感想＞

- 自分の名前も友達の名前も、一つしかなく、すばらしいものだということに気付きました。
(3年生女子)



全校朝会



学校だより「皿ヶ嶺」

＜なかよし集会＞

- 「ビューティフルネーム」 1、2、3年生
名前に込められたお家の方の思いを発表しました。名前は世界でたった一つの宝物です。
- 「朗読」 4、5、6年生
「大切な命」「じんけんの詩」の朗読をしました。その一言一言から「命の大切さ」「差別をなくそう」という強い思いが伝わってきました。
- 「本の読み聞かせ」おはなしウーフ
「ええやん そのままで」の朗読。「そのままのあなたがいいのです。」そんな温かい思いが伝わってきました。

＜重信中学校＞

各教科や道徳・特別活動で、互いの立場や思いを大切にしながら自己を表現する力の向上を目指して、言語活動の充実に重点をおいて、それぞれの指導の在り方の見直しを行った。

ア 保護者との連携による人権集会等の取組

○ 実施日 平成22年6月20日(日)第5・6校時

○ ねらい

- ・人権劇の発表と鑑賞を通して、身近ないじめ問題について真剣に考える。
- ・人権劇の登場人物について自分の感想や意見をもたせ、自他を大切にする人権感覚を育て、いじめを許さない態度を養う。



学級活動

○ 人権集会・参観授業の流れ（全校生徒及び保護者対象）

- ・生徒会本部役員による「重中人権宣言」の説明と「学校を明るくする調査」のいじめに関する項目の集計結果の発表
- ・演劇部による人権劇「夢、現実、そして未来」の発表
- ・学級活動での話し合いのポイントの確認（人権・同和教育主任）
- ・学級活動（「いじめをなくすために」を全学級で参観授業として公開）
- ・各学級で東温市作成のリーフレットを配布・説明

集会・人権劇から学級活動への流れのなかで、いじめは身近に起こる問題であり、放置すれば深刻な事態を招くことについて生徒個々が真剣に考えた。保護者にも参加してもらうことで、家庭でも話し合う話題を提供することができた。

イ 道徳の時間「明日もまた生きていこう」（3年生）の実践

17歳で女子バレーボール全日本シニア登録選手になり、北京オリンピック出場を夢見たが、がんを発症し、闘病しながら大学に入学するも、再発のために自主退学、21歳の若さでこの世を去った横山友美佳さんの自叙伝を資料化した。



道徳の時間

〈生徒の感想〉

- すぐ成長しなくてもいいから一日一日を大事に過ごして少しずつ成長すればいいなとあらためて思いました。その積み重ねた日々が一年となり、成長していくと思います。だから、今がたった1/365日かもしれないけれど、自分の生きた証として日々を生きていきたいと思っています。

生徒は、筆者の生き方を通して、生きていることのありがたさに深く思いを寄せ、今ある命を精一杯に生きていこうとする姿に共感することができた。生命はかけがえのない大切なものであり、一度失われたら二度とは戻ってこないものだということについて深く考えさせることで、自己の生命のかけがえのなさに気付き、今を生きていることのありがたさに思いを寄せ、自己の生命を大切にするだけでなく、他の生命も大切しようとする気持ちを高めることができた。

Ⅲ 研究の成果と今後の課題

1 東温市の取組

(1) 検証結果

ア いじめの認知件数及び不登校の児童生徒数（東温市全体）

	小学校	中学校	合計
平成20年度	4	37	41
平成21年度	9	11	20
平成22年度	1	10	11

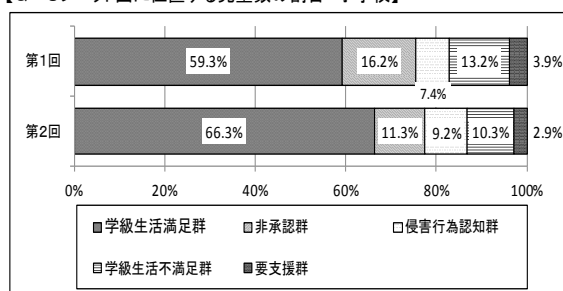
いじめの認知件数（各年度とも12月末まで）

	小学校	中学校	合計
平成20年度	5	25	30
平成21年度	4	20	24
平成22年度	2	10	12

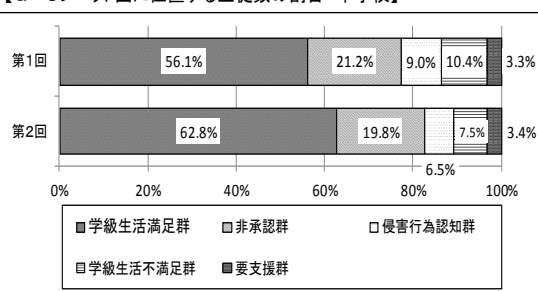
不登校の児童生徒数（各年度とも12月末まで）

イ 心理検査（Q-U）による検証（研究推進学校群）

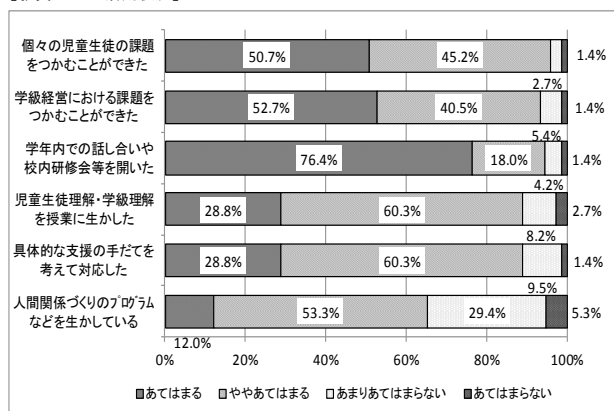
【Q-Uプロット図に位置する児童数の割合 小学校】



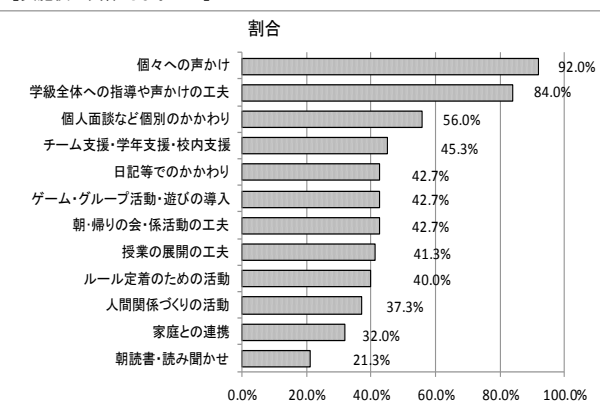
【Q-Uプロット図に位置する生徒数の割合 中学校】



【教員のQ-U活用状況】

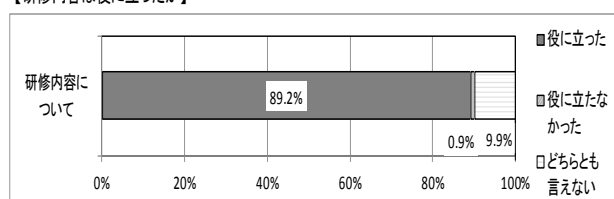


【実施後の具体的な手立て】

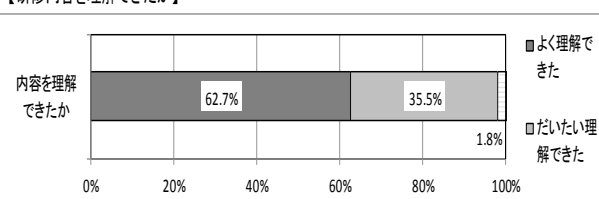


ウ 夏季休業中の東温市教職員研修会

【研修内容は役に立ったか】

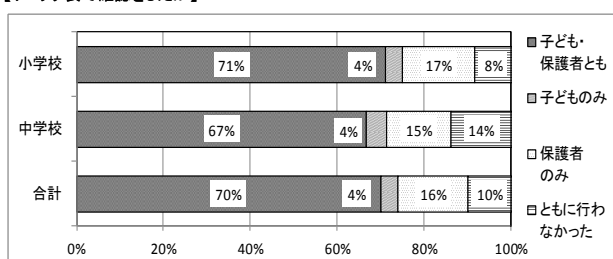


【研修内容を理解できたか】

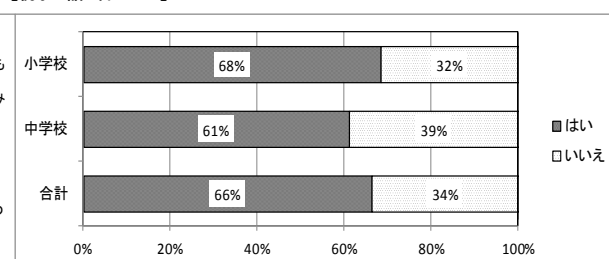


エ リーフレット活用状況

【チェック表で確認をしたか】



【親子で話し合ったか】



(2) 成果

ア 本市のいじめの認知件数は、平成 20 年度をピークに最近の 2 年間は減少傾向にある。また、いじめの認知件数と同様に不登校の児童生徒数の減少もみられる。特に、平成 22 年度は、研究推進学校群における減少が著しい。これは、平成 21 年度より取り組んできた「よりよい学級づくりと友達づくり事業」及び今年度の「いじめ対策ネットワーク研究」による成果が現れたものと考えられる。

イ 心理検査（Q-U）による検証では、小中学校ともに第 2 回に満足群の増加がみられた。これは、教職員がチームとなって学級づくりに取り組んだことが大きな成果となって現れたものである。心理検査（Q-U）後の活用状況で「学年内での話し合いや校内研修会を開いた」や「個々の児童生徒の課題をつかむことができた」という回答が非常に高い数値を示していることから分かる。また、具体的な手だてとして「個々への声かけ」「チーム支援・学年支援」や「ゲーム・グループ活動・遊びの導入」など、検査結果に基づく対応を行っていることが分かる。

ウ 教職員研修会におけるアンケートでは、役に立ったと答えている教職員が約 9 割おり、一定の効果があつたと考えられる。学級経営に対し、意欲的な姿勢を示す回答が多かった。

エ リーフレットによる啓発は、96%の保護者がリーフレットを見ており、啓発の手段として有効であったといえる。特に、リーフレットの配布方法について、「参観日等の利用」「添付文書

による配布意図の伝達」「確実に保護者に渡ったことの確認」等の工夫をしたことがこの結果につながったと考えられる。

(3) 課題

- ア いじめや不登校の減少が著しいとはいえ、まだ全てが解消しているわけではない。全体的にはよい傾向を示しているが、たとえ1件でも、深刻ないじめは命にかかわる重大な問題である、という認識を今後も持ち続けなければならない。
- イ 心理検査（Q-U）の活用について、更なる研修が必要である。今後は、各校の実践や工夫等の情報交換を行ったり、先進地域との交流を行ったりすることも検討したい。また、心理検査（Q-U）に関する予算を今後も確保する必要がある。
- ウ 教職員研修では、非常に役立ったという意見がある反面、求める内容と異なるという意見もあり、個々の参加者のニーズに沿った研修会の在り方の難しさが浮かび上がった。
- エ リーフレットを見て、親子での話し合いを行った家庭は約7割であった。更に多くの親子が話し合えるようにしていくことが必要である。

2 研究推進学校群の取組

(1) 成果

- ア 小中学校の連携について
 - 授業参観や心構えの講話、部活動体験を通して、児童の心理的不安が軽減され中学校にスムーズに入学できる働きかけができた。
 - 中学生や他校の児童と直接触れ合う交流会が実施され、クイズを楽しむ中で新たな人間関係づくりに対して期待を高めることができた。
- イ 心理検査（Q-U）を活用した取組について
 - 心理検査（Q-U）の結果を活用して、学級活動や道徳の時間に意図的に仲間づくりを進めることにより、集団への所属感が高まり、個々の児童や生徒の居場所づくりを推進することができた。
 - 心理検査（Q-U）及び学校生活に関するアンケートを複数回実施することによって、学級担任が児童生徒の人間関係や心理状態を意識することができ、人間関係や個々の不安を改善することができた。
- ウ 各校独自の取組について
 - 各授業において言語活動の充実を図り、かかわり合い、伝え合う場を具体的に設定することは、事物や事象、他者や自己とかかわることへの意欲を向上させるのに効果的であった。
 - 異年齢集団での活動の幅を広げることにより、感謝の気持ちや相手を思いやる気持ちが言葉として表現されるようになり、他者に対する思いやりの心が醸成された。

(2) 課題

- ア 小中学校の連携について
 - 部活動体験に参加できなかった児童、不安を抱いている教科の参観ができなかった児童がいる。今後もできるだけ多くの体験ができるような交流の在り方を計画していく必要がある。
 - 各学年間や小中学校の連絡を密にし、情報の共有を図ることは今後とも継続していく課題であり、必要な情報を正確に引き継ぐことが重要である。
- イ 心理検査（Q-U）を活用した取組について
 - 学級で孤立しがちな要支援群の児童や生徒に対して、今後更に具体的で効果的な支援の手だてや指導体制の確立が求められる。
 - いじめ問題に関する事例研究や児童生徒理解にかかわる教職員の指導力向上を図るための実践的な校内研修を更に推進していく必要がある。
- ウ 各校独自の取組について
 - 他者を思いやる心を育て、伝え合う力を高めていくためには、学級や集団での支持的風土を培うことが不可欠である。学校全体での集団活動の充実や道徳教育の推進について見直ししていく必要がある。
 - 人間関係に起因するトラブルは途絶えることがなく、ソーシャルスキルについての指導を充実させていく必要がある。

